

答辞

本日は、看護学研究科の学位記授与式に、諸先生方のご臨席を賜り、誠にありがとうございます。また、皆様からのご懇篤なる励ましのお言葉を頂戴いたしまして、修了生を代表して深く御礼を申し上げます。

私は、本学で学生の実習指導を行う中で、様々な患者や家族と出会い、対象が看護者に求めていることは何かと疑問をもつようになりました。また、本学の学部生の講義の中で、医療機関に入院する患者の家族への看護を共に振り返る中で、家族への看護の奥深さも感じるようになりました。様々な疑問を感じる中で、先生方との出会いが、本学研究科の門戸をたたきかけでした。

研究計画を立てる際は、急性期看護とは、ソーシャルサポートとは、などを検討し、先生方からご助言頂く中で、次第に研究計画が深まっていきました。そして、いよいよ研究を開始しようとした直後に新型コロナウイルス感染症の第1波となりました。病院では我々のみならずご家族の面会も禁止され、計画が実施できない状況に陥りました。先が見通せない状況に不安になる日々が続きましたが、多くの先生方の助けを得て、研究計画の大幅な変更を行い、二度目の研究計画をたてたことは、今では大きな学びとなっています。

そこで新たに、高齢者の運動教室における参加を継続する要因を見出したいと考えました。研究を再開できた時はようやく前に進めると安堵したことを覚えています。私は、宮崎市が主催する高齢者運動教室に12年前から携わり、参加者を増やすために必要なことや、高齢者が教室に求めていることは何かと思考をめぐらせる中で、今回のテーマと出会うことができました。しかし、研究を開始してから、新型コロナウイルス感染症により、運動教室が調査直前に中止となることや、参加者の減少などもあり、再度不安な日々を過ごしました。また、調査の中では、高齢の参加者に説明をして、アンケートに記載してもらうことの大変さも感じ、先生方のご助言やご支援のおかげで乗り越えることができました。この4年間でお世話になった先生方や仲間には、改めて感謝申し上げます。

4年間の中では、研究計画発表会や論文発表会において厳しいお言葉を頂くこともありました。しかし、客観的に課題を見つめ、学ぶ大切さを考える機会にもなりました。そして、様々な論文を読んで研究の必要性を模索する充実感、自分の研究疑問を解決していく過程やデータが集まっていくことの達成感、得られたデータから結果が導き出される喜びなど、研究の楽しさを知ることもできました。

今後の私の使命は、研究で得られた成果をもとに、さらに研鑽しながら人々の健康と看護の発展のために尽力していくことだと考えております。

最後になりましたが、励まし、熱いご指導をいただきました諸先生方、この研究にご理解、ご協力くださった地域の高齢者のみなさま、アンケート実施にご協力いただきました皆さま、そして、温かく見守ってくれた家族に深く感謝を申し上げます。

本学のますますの発展と、諸先生方のご健康、ご活躍ならびに在学生の皆さまの一層のご健闘をお祈りいたしまして答辞とさせていただきます。

令和5年3月16日

看護学研究科博士前期課程修了生代表 原村幸代